

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2007～2009

課題番号：19520323

研究課題名(和文) 言語における「望ましさ」概念と主観性に関する研究

研究課題名(英文) Study on the notion of “desirability” in language and the subjectivity

研究代表者

阿部 宏 (ABE HIROSHI)

東北大学・大学院文学研究科・教授

研究者番号：10212549

研究成果の概要(和文)：

主観性概念、特に「望ましさ」判断の観点から、フランス語、日本語、英語について分析を行い、主観化は個々の語や文法項目ごとに散発的に観察されるのみならず、同時に複数の辞項や文法価値を巻き込むようなダイナミックな方向性を示す現象であること、その基盤として、従来よりモダリティ研究で指摘されてきた「真実性」に加えて「望ましさ」、「実現要請」があること、などを明らかにした。

研究成果の概要(英文)：

We have researched on the notion of the subjectivity, in particular that of the desirability, in analysing the French, the Japanese and the English. We have remarked that the subjectivity is not only pointed out in each individual word or grammatical category, but it is a dynamic movement that involves plural items and grammatical values simultaneously, that there are the desirability and the request of realisation in addition to the factuality analysed previously in the study of the modality.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2007 年度	1,000,000	300,000	1,300,000
2008 年度	900,000	270,000	1,170,000
2009 年度	1,000,000	300,000	1,300,000
年度			
年度			
総計	2,900,000	870,000	3,770,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：言語学

キーワード：意味論

1. 研究開始当初の背景

近年の言語研究は、個別言語の語彙体系や文法機能の基盤に言語普遍的な認知のレベルがあることを明らかにしつつあるが、その中でも話し手の判断、いわゆる主観性概念に注目が集まっている。しかしながら、任意の事態について「望ましい」あるいは「望ましくない」とする「望ましき」判断の存在については、数少ない散発的な指摘があるだけで、国内においても国際的にも統一的な研究がまだ行われていない。

アメリカ系の研究は客観性に還元可能で統語的な言語現象のみを考察対象にする傾向があったが、20世紀末からの認知文法、文法化理論、類型論、言語習得研究などの発展によって、しだいに意味への関心、特にその中でも従来は修辞学、文学研究、文体論の領域であるとして言語研究の中で無視されてきた観のある主観性やメタファーへの関心が高まっている。しかしながら、主観性・通時的主観化、またメタファー化の仮説は草創期の段階にあり、ここからどのような統一的な原理が抽出できるかはいまだ未解明の部分が多い。

他方、意味への関心が高いフランス語学や日本語学においては、Bréal, Bally, Benveniste, 三上章, 時枝誠記, 南不二男など、言語における話者の判断のレベル、メタ言語的な話者の介入、対話者間関係レベルなどについて、さまざまな興味深い指摘が伝統的になされてきている。

2. 研究の目的

本研究は、フランス語、英語、日本語を主

たる対象として、この「望ましき」概念の表れを考察し、その言語普遍的な側面を明らかにするとともに、これが主観性レベルで果たす役割の解明を目的とするものである。

本研究は、理論面では、一方でアメリカ系の近年の認知意味論、文法化理論、他方でフランス語学、日本語学での意味や多義性構造の分析で得られた成果を援用するものであり、またデータ面では、フランス語、英語、日本語を中心とする対照言語学的考察から言語普遍的な知見の抽出ををめざすものである。従来の個別言語研究の枠組みを超えた地平で、総合的な言語研究の一つのモデルを提供することをめざす。

3. 研究の方法

フランス語については、plus ou moins, encore moins, qui plus est に加えて、plus que, de plus, au plus, de plus en plus, rien de plus, de moins en moins, Plus ... plus ..., on ne peut plus, non plus, en moins, au moins, du moins, à moins que, de moins en moins, Moins ... moins ..., rien de moins などの比較級形成辞 plus や moins を含む熟語・構文、直接的な比較級形成辞ではないがやはり主観的尺度に関わると考えられる même, voire, jusqu'à, depuis, また même si, bien que などの構文を中心に、考察した。

日本語については、「多かれ少なかれ」「大なり小なり」「以上でも以下でもない」「多少」に加えて、「以上」「最高」「最

低」「おまけに」「さらに」「～よりも」「ちょっと」「少々」「～から～まで」「～より」などについて、また、*La femme est la femme*、「庭は庭だ」のような同語反復文、あるいはその逆の、*Cette voiture est très abimée n'est pas une voiture*、「(ネズミを捕らなければ)ネコはネコではない」のような矛盾文、*Sois un homme!*、「俺も男だ!」のような自明文などについて、考察した。

英語については、*more x than y* タイプのメタ言語的比較構文、*what is more*, *moreover*, *no more*, *no more than*, *more and more*, *more or less*, *more than*, *neither more nor less*, *not ... any more*, *The more ... the more*, *less than*, *no less*, *not any less ... than*, *little less than*, *less and less*, *non the less* など比較級形成辞 *more* や *less* を含む熟語的表現などを中心に、考察した。

これらの検討を通じて、比較構文、比較・程度表現、また比較・程度表現が起源の熟語の多義性、空間・時間を起源とする表現、同語反復文・矛盾文・自明文、軽蔑から敬意への転化のメカニズムなどの分析を行い、それらの基本的意味と「望ましさ」概念との関係、意味拡張と多義化のプロセス、および「望ましさ」概念と「真実性」概念・「実現要請」概念との関係を明らかにし、主観性レベルの構造とそれが言語構造にどのように反映するかについて、解明を試みた。

また、主観性の基盤に自他関係、つまり間主体性を想定する見方は、すでに Benveniste, E. (1958) : *De la subjectivité dans le langage*, in *Journal de psychologie*

で提起されたものだが、Traugott, E. C. & R. B. Dasher (2002) : *Regularity in Semantic Change*, Cambridge University Press における文法化の方向性 Objective → Subjective → Intersubjective や Sweetser, E. E. (1990) : *From Etymology to pragmatics*, Cambridge University Press における root – epistemic – speech-act の多義性観もこれを支持する主張である。「望ましさ」概念について、これが主観性のみならず、間主観性レベルにおいても働くという仮説を想定し、「望ましさ」概念・「真実性」概念・「実現要請」概念について、主観性レベルのみならず、間主体性レベルにおける働きを考察し、言語機能を基底から支えていると考えられる、主観性・間主観性レベルの構造について仮説を提示した。

4. 研究成果

主観性概念、特に「望ましさ」判断の観点から理論的検討を進め、主観化は個々の語や文法項目ごとに散発的に観察されるのみならず、同時に複数の辞項や文法価値を巻き込むようなダイナミックな方向性を示す言語現象であること、主観性の基盤として、従来よりモダリティ研究で指摘されてきた「真実性」概念に加えて「望ましさ」概念、「実現要請」概念があること、また、これらの主観性概念が働く場としては、話し手の判断、つまり主観性レベル、のみならず間主体性レベルがあること、などを明らかにした。

これらの内容を、日本フランス語学会、日本学国際学会、国際言語学者会議、フランス認知言語学会、日本フランス語フランス文学会などで研究発表し、議論の中で、従来のモダリティ概念、認知意味論における主体性概

念などとの関係について考察を深めた。また研究成果については、6篇の論文としてすでに発表した。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計6件)

①Abé, Hiroshi, La locution *encore moins* et l'échelle de probabilité, *Actes du XXIVe Congrès International de Linguistique et de Philologie Romanes* (édités par David Trotter), Tome IV, Max Niemeyer Verlag, Tübingen, pp. 488-493, 2007年9月15日、レジュメ審査有。

②阿部宏, 「比較文法を批判してソシユールが考えたこと」, 『思想』(岩波書店)「ソシユール生誕150年」11月号 (No. 1003), pp. 52-69, 2007年11月5日, 依頼原稿, 査読無。

③阿部宏, 「トートロジーと主観性について」, 『日本認知言語学会論集』第8巻, pp. 212-222, 2008年5月10日, レジュメ審査有。

④Abé, Hiroshi, La tautologie et la notion subjective de « désirabilité », *Current Issues in Unity and Diversity of Languages, Collection of the papers selected from the 18th International Congress of Linguists held at Korea University in Seoul on July 21-26*, Published by The Linguistic Society of Korea, Printed by Dongnam Publishing Co., pp. 3266-3278, 2009年2月25日, 査読有。

⑤阿部宏, 「日本語における「望ましき」概念について」, *Civilisation of Evolution, Civilisation of Revolution, Metamorphoses in Japan 1900-2000 (A. Jablonski et al. eds.), Proceedings of the international*

conference in Japanese Studies held in Krakow in October 2007, Museum of Japanese Art & Technology Manggha, Krakow, pp. 81-94, 2009年9月, レジュメ審査有。

⑥阿部宏, 「Au moins, du moins, encore moinsと主観性」, 『フランス語学研究』(日本フランス語学会), 第44号, pp. 33-48, 2010年5月(印刷中), 査読有。

[学会発表] (計8件)

①阿部宏, 2007年9月22日(日本認知言語学会第8回大会), 「トートロジーと主観性について」(於成蹊大学)。

②阿部宏, 2007年10月26日(The International Conference in Japanese Studies: Civilisation of evolution. Civilisation of revolution. Metamorphoses in Japan 1900-2000), 「日本語における「望ましき」概念について」(Jagiellonian University, Krakow, Poland)。

③阿部宏, 2008年1月25日, 「ソシユールの恣意性概念と言語における主観性について」, 「ソシユール150年-新手稿・主体・時間・人称・倫理-」(東北大学大学院文学研究科主催)(於東北大学)。

④阿部宏, 2008年4月26日(第246回日本フランス語学会例会), 「シャルル・バイイの一節をめぐって - au moins, du moins, encore moins と主観性-」(於慶応義塾大学・三田)

⑤Abé, Hiroshi, 2008年7月21日(The 18th International Congress of Linguists), 「La tautologie et la notion subjective de « désirabilité »」(於高麗大学, ソウル)。

⑥阿部宏, 2009年5月23日, 「主観性と文法化・無意味文・省略文」, 「ことばに主体は

どのようにあらわれるか：フランス語と認知言語学（日本フランス語学会・シンポジウム）（於中央大学）。

⑦ Abé, Hiroshi, 2009年5月27日, 「Étude contrastive japono-française sur la “désirabilité”」, Troisième colloque international de l'Association Française de Linguistique Cognitive (Paris Ouest Nanterre La Défense).

⑧ 阿部宏, 2009年11月8日, 「主観性概念の系譜とソーシャル」, 「ソーシャルと19世紀—自筆原稿への新たな視点」日本フランス語フランス文学会・ワークショップ（於熊本大学）。

〔図書〕（計0件）

〔産業財産権〕

○出願状況（計0件）

名称：

発明者：

権利者：

種類：

番号：

出願年月日：

国内外の別：

○取得状況（計0件）

名称：

発明者：

権利者：

種類：

番号：

取得年月日：

国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

なし

6. 研究組織

(1)研究代表者

阿部 宏 (ABE HIROSHI)

東北大学・大学院文学研究科・教授

研究者番号：10212549

(2)研究分担者

なし (0)

研究者番号：

(3)連携研究者

なし (0)

研究者番号：